富山市の中世城館(5)－寺島館跡－

はじめに

寺島館跡は、東西を神通川の旧河道に挟まれた中洲状の河岸段丘上（標高約 5m）に位置します。主に平安時代・鎌倉時代の遺跡です。鎌倉時代（12 世紀後半～13 世紀）には、館が築かれました。

寺島館跡は、今市遺跡（縄文時代～近世の集落遺跡）内にあります。平成 22 年の発掘調査成果から、館の範囲を推定しました。館からは、射水平野や富山平野を一望できます。この地は、海沿いの街道と神通川を利用した南北に延びる河川交通が交わる要衝でもあります。

寺島館跡の範囲と
調査区の位置（●）

発掘調査の概要

平安時代の様相

ほぼ正方形に近い竪穴住居（5.6m×4.9m）を 1 棟検出しました。床面積は約 32.7 ㎡（約 20 畳）と、やや大型の竪穴住居に相当します。10 世紀前半頃の住居で、北東隅にはカマドが設けられていました。食器（土師器皿）のほか、食器（須恵器坏蓋）を再利用した硯や、能登地方特有の形をした製塩土器が出土しました。

竪穴住居以外からも 9 世紀～10 世紀前半の食器（土師器・須恵器）が出土しており、調査区周辺に平安時代の集落（「寒江郷」の一部）が営まれていたと考えられます。また、次に紹介する鎌倉時代の大溝と平安時代の竪穴住居の向きが一致することから、平安時代の集落の地割りに即して、鎌倉時代の土地利用が行われていた可能性があります。

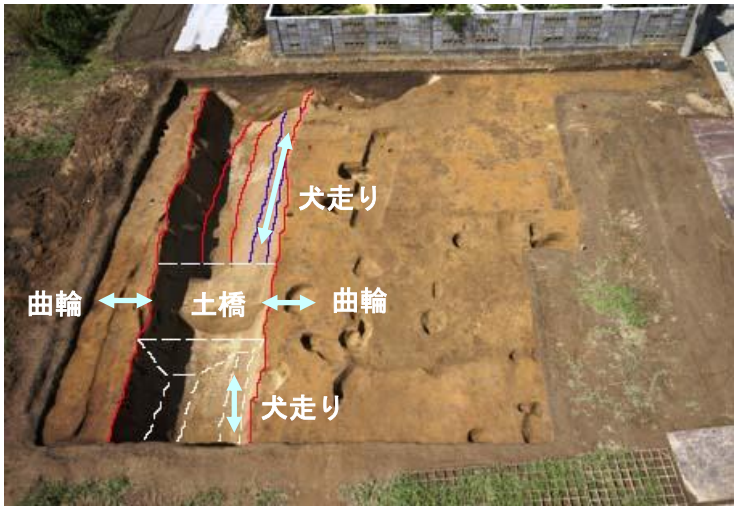
鎌倉時代の様相

調査区の南側で東西にまっすぐ延びる大溝が見つかりました。大溝は同じ場所で同じ方向に 3 回掘り直されていました（Ⅰ～Ⅲ期）。出土した土器から、その期間は 12 世紀後半～13 世紀であることがわかりました。

(1)Ⅰ期の大溝　最も古いⅠ期の大溝は、断面がU字形で、幅 3.6～4m、深さ 2mありました。地面が砂質のため、そのままでは水が地下に浸み込んでしまうため、底には粘土質の土を薄く敷いて、溝を管理していました。この大溝は、中世の寒江荘内の耕作地へ続く灌漑用水路と考えられ、周辺には水路の管理施設があった可能性もあります。

(2)Ⅱ期の大溝　Ⅰ期の大溝の一部（幅約 2.5m）が土橋として人為的に埋められました。

大溝は幅 3.4～4m、深さ 1.8mで、断面はＶ字形です。大溝は空堀と考えられます。このような堀は薬研堀（片方の斜面が緩やかな片薬研）と呼び、城や館の堀にみられる特徴的な構造です。土橋は曲輪（館の敷地）間をつなぐ通路で、南北には曲輪があったと考えられます。空堀の北側斜面には土橋より一段低い、幅 60cm の平坦面（犬走り）がありました。



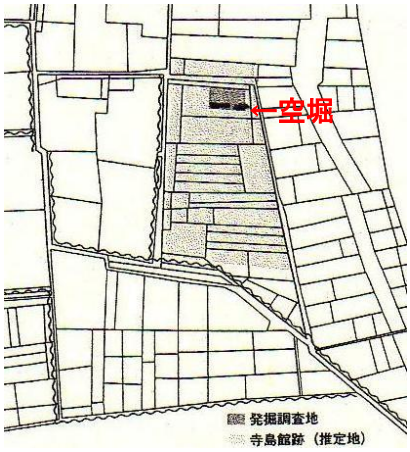
検出した館関連遺構（Ⅱ期）と推定復元
（赤・青線：検出箇所、白点線：推定箇所、写真右が北）

発掘調査の成果

中世の寒江荘に関する新知見

越中の政治的中心地（放生津）があった射水平野東部では、平安時代後期（1090 年）に京都下鴨神社領荘園の倉垣荘が設けられました。

『下村史』では、『倭名抄』（10 世紀に編纂された辞典）に古代の「寒江郷」がみえることから、倉垣荘以前に開発が始まったとしています。文献に中世の寒江荘が登場する 14 世紀末より早い段階に、本遺跡で荘園関連遺構と考えられる灌漑用水路（Ⅰ期の大溝）が開削されたことは、このことを裏付けるものです。



館の推定範囲と空堀の位置
（縮尺約 1/400）

県内初期の例となる中世館跡

平氏政権から源平の争乱を経て源氏政権へと時代が移り変わる際、越中でも在地領主や国人と呼ばれた武士団が活躍しました。寺島館跡のある寺島は、室町時代に国人寺島氏を輩出した可能性のある土地です。検出された空堀・土橋・犬走りから、鎌倉時代のこの地に有力者がいたことが明らかになりました。

明治時代に作成された地割図から、館は「高田」という小字の微高地にあったことがわかりました。地割図の検討から、館は東西 60m、南北 100mの範囲に復元することができます。南砺市梅原胡摩堂遺跡では 12 世紀後半～13 世紀の方形館跡（規模：120×35m以上）が検出されており、寺島館跡も含め、初期の城館と言えます。いずれも、交通の要衝にあったことが大きな特色です。

主要参考文献　『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ』　富山市教育委員会　2011 年
『下村史』　下村役場　1986 年